

現代中国における現代化言説の生成と変容

——言説空間の再編に注目して——

李 永晶

改革の最中にある現代中国社会には、諸々の新しい社会認識が形成されている。それらの認識を分析するために、本稿は、現代中国の社会思想にとって一貫した主題である現代化言説の生成と変容に注目する。具体的に「革命」、「現代化」と「(後)現代性」といったタームを言説の水準での基本的な骨格として、それぞれの言説と社会的諸実践との関係を軸に現代化をめぐる言説空間の編成に迫る。本稿の検討から現代化がいかに構想され探究されてきたかが理解されると同時に、今日の中国において諸々の社会認識が生成するメカニズムもまた読み取れると見込まれる。

1 はじめに

現代中国においては文化大革命の收拾を境にして、既に四半世紀にわたる社会の再建が行われてきた。そのプロセスは依然として進行中だが、中国社会の変動は既に目覚ましい様相を見せている。他方、それに伴って社会思想の領域では、現代中国社会に対する認識に大きな改変が生じ、新しい知が次第に形成してきている。例えば1990年代に入って、「市民社会論」をはじめとする多様な言説が中国社会思想の空間においてそれぞれのポジションを獲得するようになった。これもまた進行中の変動ではあるが、一種の社会認識の地殻変動が既に起きているように思える。では、これらの知的現象をどのように捉えるべきだろうか。

先行研究としては、社会思想の研究者らが既に幾つかの側面を指摘している。例えば広範に読まれている汪暉の論文が代表的なものである¹。汪暉は現代中国の社会思想の構図を「現代性」の視点から素描し、「現代化」思想の得失を論

じている²。この論文は現代中国の社会思想の領域における現代性という概念の定着を加速させ、1990年代の中国社会思想を見る一つの手がかりとなったように思えるが、「現代性」を批判なしに立論の前提に据えた結果、「現代性」そのものが社会発展の必然的な目標とされてしまっている。

他方、1990年代の歴史学領域における「現代化」パラダイムの導入とそれに対する大きな反響（羅2004）を踏まえると³、汪暉が代表している研究は次のような視点の重要性に十分に配慮していないと言わざるを得ない。それは、現代化への構想と探究を現代中国の社会思想における一貫した主題としてみるという視点である。例えば、この視点からすれば、そこで中国社会科学の領域において多用されている現代性の用語は、他でもない、現在の中国社会における現代化を意味するものとして理解することも可能である。ゆえに現代性という用語の使用を、単なる一時の思想的な潮流としてでもなければ、中国社会の発展目標に対する知識人のコ

ンセンサスの一つとしてでもなく、それを現代化の構想と実践に対する最新の論述として理解することができることになる。そして、この視点を採用することによって始めて、現代化が常に中国社会認識における焦点であったことや、だからこそ、現代化がいかに多様に論述されてきたかを検討することを通して、1990年代以降に形成された様々な社会認識を分析する可能性が開けてくること、などが理解できるのである。以上を踏まえて本稿では、新しい社会認識に対する研究の一環として、現代化言説の史的諸相を描き出すことを課題としたい。

この課題に対して本稿は基本的に言説分析の方法を用いるのだが、具体的に言説と社会的諸実践との相互作用の場としての言説空間の編成に注目し、現代化が、変化する言説空間においていかに論じられてきたのかを分析する。では、なぜこの方法が本稿にとって必要であるのか。

言説空間とは何か、というのが今日の社会(科)学分野における難解な問題の一つとされているが、本稿としては次の点を指摘しておきたい⁴。現代中国においては、ある種の「現代化」をめぐる発せられた言葉には政治が存在すること、また社会変動から一般の人間の生活まではそれらの言葉に拘束されること。そしてそれらの言葉——すなわち言説——の編成、布置と作動する圏域を言説空間と呼ぶことにする。したがってこのように措定される言説空間は、もはや「言説の歴史社会学」に見られるような現実から遊離する資料空間のようなものではない⁵。この概念を通して本稿が示唆したいのは、現代中国における社会変動と現代化をめぐる言説空間との密接な関係であり、また現代化それ自体がこうした言説空間の中で常に論じ直されているという点である。

さて、現代化に関する新しい言説とそこに形成する社会に対する諸認識を考えると、それまでの現代化の言説空間にとって異種の言説がいかにして既存の言説空間を切り開き、市民権を獲得するようになったのか、という問題がまず出てこよう。この問いに対して言説の源流と目されうる中国社会の経験的変容に答えを求めることができる。すなわち社会変革の中で、人々の観念が次第に変わり、最終的にそうした観念を捉える言語のレベルにおいてそれぞれの言説が現れてきたということである。他方、こうした経験的な要因に対して、現代化をめぐる言説空間それ自体の変容に内在する要因もまた挙げられる。

事実、1949年に樹立した社会主義を標榜する新中国はマルクスレーニン主義・毛沢東思想を真の科学的社會認識として、他の認識をブルジョワのもしくは封建的なイデオロギーと見て、それらの存在の合法性を認めようとしなかった。そこで、上述のオーソドックス的な言説を中心とした一元化した言説空間が成立した。そしてこうした思想・知の領域における中心的な言説の支配は、現代中国における現代化をめぐる言説空間の最も顕著な特徴となった。結局、このような言説空間が他にもなく、フォーコー的な「真理体制」(Foucault 1984: 95)の機能を果たしていた。あらゆる社会(科)学的な社会・歴史認識もしくは知の真理性は、この体制によって保障されることとなった。

ところが改革の時代の中で、イデオロギーの影響力は次第に衰えており、上述の真理体制から解放された諸言説は、現代化論をめぐる互いに張り合いつつ、新たな編成と布置を形成していく。にもかかわらず、現代中国において社会主義が銘打たれている限りでは、社会主義とそれを支える基本的な社会認識——社会と歴史

の完成を意味する共産主義への過渡期としての社会主義社会——に公然と挑戦する言説が容易に成立するわけではない。であればこそ、いかにしてオーソドックスな言説を損ねずに言説空間を切り開くか、このことが生成する新しい現代化の言説の死活に関わる問題となってくる。

上述の事態により、新しい言説は、既存の言説空間に生成するべく、既存の「真理体制」との複雑な交渉プロセスを経過せざるを得なかった。そこで、現代化をめぐる言説空間の編成のメカニズムには、新しい諸認識形成を形成させる動因があると考えてよいだろう。これが本稿の主題設定の所以である。具体的には本稿は現代中国の異なる歴史の時期における中心的な言説としての、(1) 革命、(2) 現代化、(3) (後)現代性をめぐる言説空間の編成を描き出しつつ、それぞれの言説空間において現代化がどのように語られてきたのかを明らかにしていく。

2 革命の言説空間

周知の如く、長期にわたって現代中国のイデオロギーと社会認識を支えてきた言説の一つとして、「革命」がある。事実、1978年の政策転換までは、中国社会は革命を中心に組織されていたと言っても過言ではない。では、革命の言説空間がいかに編成され、また現代化はどのように問われていたのだろうか。本節では、これらの問題を論じていきたい。

2-1 革命の言説空間の編成

ここでは歴史的な事実としての革命を再検討する余裕がないが、認識の次元においては革命に国家的・民族的未来が託されているがゆえに、革命の言説空間の編成に対して、(1) 革命の意味とナショナルな叙述をめぐる革命言説の編

成、と、(2) この言説の人々の日常生活への浸透、の二つの側面からアプローチする必要があると思われる。

(1) 革命の意味とナショナルな叙述の再構成——革命とは何か。この用語は古くから使われてきたが、20世紀の初頭になって新しい意味が付与された。陳建華が指摘するように、それは「暴力の手段を唱えると同時に、民主と民族の内容を含む社会変革の種々の約束をも意味する」(陳 2000: 18-9)。換言すれば、革命とは単なるある種の政治行動を意味するだけではなく、より広い文化的観念として19世紀の末から20世紀の冒頭にかけて成立したものである⁶。こうした革命の意味は20世紀の前半に「辛亥革命」、「国民革命」、「抗日戦争」、「新民主主義革命」、「社会主義革命」を通して一貫しているものである。

他方、1949年後の現代中国の社会思想を支配してきた革命の意味は、毛沢東主義によって規定されたものと見ることができる。毛沢東の論文『中国革命と中国共産党』(1939)において革命の段階論が示しているように、それは共産党の指導する革命運動を通して社会主義ないし共産主義を中国に実現することを意味するものである⁷。この定位が有していた強い規定性のために、現段階における中国社会の発展は革命という目標に回収されるようになったのである。かくして革命の言説には社会発展の完成としての共産主義という究極的な意味を付与されることになる。このように革命の意味は社会変動の様式を指す用語から、社会発展にある種の価値を保証する用語へとシフトしたのである。

さて、革命という言説が一旦社会発展の方向と結び付くと、新しい認識のパラダイムがそこに立ち上がってくる。そして1949年の建国と

その後の社会運動の中で、革命はナショナルな歴史の叙述の枠組みとなった。特に新政権の合法化を中心に、「五・四運動」から「社会主義革命」までの一連の出来事は、ナショナルな解放と自立の歴史に編入されていた。また単に近代の歴史だけではなく、中国歴史上での数多くの「農民戦争」、「王朝の交替」などは、すべて「革命」、「階級闘争」によって書き換えられていた。結局、「ナショナルイズムの叙述の中で、搾取階級と被搾取階級との対立が立てられ、……歴史上の反乱と蜂起は、栄光のある反搾取、反抑圧の革命史として構築し直されていた」（李 1999: 114）。こうした言説空間の中で、革命の叙述と革命史観を再生産するメカニズムが形成した。

上述の革命を中心とする大いなる叙述に対する質疑と批判が、近年現れてきているのだが（後述）、革命の言説が支持を得ることができた理由としては、歴史的経験によるところも無視できない。この点は、中国の歴史研究における「救亡」（亡国からの立ち上がり、すなわち救国）というよく反復されているテーゼから理解されるだろう⁸。すなわち、中国社会においては伝統的に国家の独立こそが最も重要な目標とされており、革命という言説はまさにこの大義名分に訴えることを通じて合法性ないし神聖性を獲得したのである。

他方、革命の叙述は単に歴史に志向するものではなく、未来への志向をも内包している。本来、マルクス主義は資本主義の現代性と現代化を批判し、その史的唯物論によれば、来るべき社会主義社会は、資本主義に対する否定となり、社会形態の面でより進歩的な社会であるとされる。実際、「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の具体的実践とを結びつけた所産」と定義づけられた毛沢東主義は、まずはマ

ルクス主義の継承と発展とされており、社会主義社会こそがあるべき現代社会像とされる。このように、革命の言説は中国社会発展の未来を支える言説となり、ナショナルな統合にもつながるものとなった。

しかし、上述のナショナルな叙述の構築には一つの特異な点がある。すなわち、「毛沢東流のイデオロギーが一切を覆い尽くし、清末以来の民族と国家に関する想像が、根本的とも言える改造を加えられたということ、そもそも中心的な地位にあった『民族』『国家』『民族文化』といった概念が、『階級』『人民』『社会主義』といった別の概念に取って代わられたということだ」と（王曉明 2004: 210）。かくして中国の再建は「階級」にその基盤を置いているがゆえに、近代一般の国民国家と相異なる側面を持たざるを得なくなった。

（2）革命言説による日常的現実の構築——ナショナルな叙述の構築の一環として、革命言説を中心に、「階級」、「階級闘争」、「搾取」、「人民」、「社会・共産主義」などが布置されていた。そしてこれらの言説は次第に人々の日常生活に織り込まれていき、次第に新しい日常生活の現実を作り出していった。もちろんこれらの言説は抵抗なしに人々の生活に浸透していくのではなく、建国後に数回繰り広げられたイデオロギー闘争は、上述の革命の言説群を定着させようとしたものであった⁹。この点は特に経済的、文化的に遅れていた農村社会に先鋭に現れていた。

実際、建国後の農村社会運動は何よりも階級の認定と階級闘争をダイナミズムとしていた。人民公社の研究者張楽天（1998）の研究は階級闘争の言説がいかに人々の日常生活に織り込まれていたかを示している。彼によれば、「人民公社の樹立とともに確立したのは、それに相

応する革命という国家の言説であり、それらの言説はさらに会議、ラジオ放送、スローガンによって繰り返され、人民公社の一側面をなしていた(張 2001: 73)。その目標は他でもなく「階級」と「階級闘争」の言説とその実践を通して伝統的な農村社会の社会構造と権力構造を破壊し、農村における社会主義革命を達成させることなのである。そして結果的には革命とそれに関連する諸言説——地主、富農、貧農、中農——などの確立は、農村社会の構造変動を促しており、成功を取めたと見えよう(彭・鄧 2003: 84)。

ここで重要なのは、上述のような人々の日常生活に入り込んだ革命の言説群は人々の振る舞いに影響と拘束力を与え、革命的現実もしくは雰囲気を作り出した、という点である。例えば民衆のアイデンティティとしての「人民」とは、映画、小説、演劇などの芸術形式を通して、国民国家の「虚構の種族的基礎」すなわち「労働人民」(李 1999: 110; 藍 2003)として作り上げられたのである。逆に「労働人民」というカテゴリーは抽象の理念を保ちつつ、日常的な実践の中で生身の内容——例えば「貧農」と認定された人々——を獲得していた。かくして革命の言説空間は現実を強く規定した側面を見せているのである。

2-2 革命的現代化の言説

以上で述べたように、中国社会についての構想は革命の言説に収斂し、革命言説は中国の現代化のヴィジョンに対して大きな影響を与えていた。この事態の中で、現代化論それ自体が革命の言説空間に依存せざるを得なかった。

主に資本主義社会の否定とされた社会主義の構想と中国革命の中で形成された毛沢東主義の混交の過程で生じた現代社会に対する認識に

は、二重の意味合いが潜んでいたと考えられる。(1) 資本主義社会に普遍的に存在している工業社会の形態としての現代。この点は工業化として、伝統的農業社会から工業社会への転換が描かれたことから理解される。(2) 資本主義と本質的に異なるとされる社会主義の現代。後者の場合、その進歩性は科学的マルクス主義によって裏付けられるものだと見なされていた。そうすると、中国革命の成功によって経済以外の面で中国が既に資本主義諸国より進歩的・現代的になったのではないかという認識の下で、中国に残った課題は工業化の実現だけだとされていた。

こうした認識の中で、革命の方式——政治動員と大衆路線——こそ、が現代化のダイナミズムと見なされていた¹⁰。つまり革命の言説空間においては、革命こそ、現代化の手段であると同時に目的なのである。そこでは、現代化が有すべき社会学的意味——工業化、市場経済、民主主義、社会的分化、都市化、公教育の普及などの主題群——は無視されており、現代化はもっぱら革命の言説に従属させられた。

以上のような現代化論は、中国社会に次の二つの問題を課していた。それは中国において工業化を実現すること、と、社会主義の諸制度を建設すること、の二つである。だが、この二つの課題はほぼ産業社会以前の状態にある中国社会にとっては容易なことではなかった。そしてこの時期の中国は、資本主義諸国とは異なる現代化の道の探求を試みた。

簡潔に述べると、社会制度の面では、公有制の実行、農業・重工業の優先的な発展、国民経済の社会主義的改造、農村の協同化運動、人民公社化運動、大躍進などの政策が実行されていた(張 1998)。これらの制度とその実行に伴う社会運動は、政治動員と大衆路線によって支え

られていた。つまりこの時期には現代化は政治をダイナミズムとして行われたのである。このように、革命の言説空間は、単に理念だけではなく、社会の物質的な生産実践によって保証されていた。

3 現代化の言説空間

前節で検討した「革命」以外のもう一つの言葉で20世紀中国の社会的歴史的変動を捉えるならば「現代化」ほど妥当な言葉はなかろう。特に巨大な混乱と災難を招いた文化大革命(1966-1976)の終焉に伴って、現代化を通して現代社会を建設することは、挙国一致の目標とさえなった¹¹。こうした状況の中で、社会思想と社会政策の領域では、革命の言説の放棄と現代化の言説の新たな提起を通して、言説空間の再編成が行われた。言説の再編と改革の実践とが相まって、現代化という言説は最終的に正当性を獲得し、次第に隆盛していった。本節では、主に1980年代に成立した現代化の言説空間の編成を検討したい¹²。

3-1 現代化の言説空間の生成

事実、文化大革命の失敗は中国社会にとって重大なイデオロギック・社会的な危機となった。この事態の中で、新政府がこれまでの革命的現代化の方式を放棄し、これからの自己変革を正当化するため、何よりもまず現代化に明快な規定を与えることを迫られた。そして1978年以前に既に用いられた「四つの現代化」——農業、工業、科学技術、と国防の現代化——が大いに提起され議論されるようになった。その結果、現代化それ自体の価値がはじめて革命的言説空間から相対的に自立するようになった。革命から現代化への転換は相当に複雑な過程ではある

が、次の二つの側面、すなわち現代化言説の成立とその社会生活に対する影響とから捉えることができるだろう。

(1) 思想解放運動——現代化言説の成立の背景には、1978年前後から1980年代の後半まで広く展開されていた、後に「思想解放運動」と呼ばれる一連の出来事があった¹³。それらの運動はまず文革に対する反省から始まった。公式に認められているように、文化大革命は中国歴史上で未曾有の災難となった。それはその時代に生きた人々にとっては、払拭できない暗黒の一頁となった。そこで、文化大革命後すぐに、それに対する感情記憶を描く文学作品やイデオロギー批判が表面化した。

その中で、「傷痕の文学」(1977-1979)に関する大討論を皮切りとして、「真理の標準」(1978-1981)、「人生の意義」(1980-1981)、「社会発展の動力」(1979-1980)、「人道主義と疎外問題」(1979-1983)、「文化ブーム」(1984-1988)などのテーマを中心に広範な議論が行われてきた(朱ほか 1997)。これらの討論は、文化大革命の災難を背景に革命の言説空間に配置されていた諸種の言説、またその言説に構築された社会的現実——実践上の制度と人間の行動様式——に広範な質疑と批判を加えていた。例えば、社会発展の動力に関する討論は、「階級闘争こそ、社会発展の牽引力だ」という認識を論破し、四つの現代化論に有力な認識論的基礎を提供していた。また「人道主義」に関する議論は主体性への再認識につながっていた。

これらの批判は知識人を中心に行われたものではあるが、最初から権力側のコントロールの下に行われたものである。そこでは社会主義的現代化という新たな言説の権威を傷つけないように厳しい規制が敷かれていた¹⁴。事実、前述

の幾つかの討論は、広範な知識人の参与によって行われたものだが、それらは最初から党（『人民日報』などの党報をメディアとして）の主導によるものであった。但し、興味深いのは、新しい言説としての現代化が旧来の認識とずれてつ、新しい認識を生み出したことであり、その認識の累積こそ、現代化の言説空間の形成へとつながっていくことである。

（2）社会生活の再組織——前節で触れたように、現代中国は長い時期で資本主義諸国の現代化を乗り越えようとした結果、「追いつき型の現代化」モデルを作り出し、社会の発展は畸形的に推進されてきた。建国後の基礎社会組織としての「単位制」が示しているように、国家は社会を徹底的に国家の管理下へと織り込み、社会発展のありとあらゆる資源——政治的、経済的、道徳的、倫理的——を独占しようとしていたのである。

ところが現代化の言説空間の中で、社会生活のリアリティもまた構築し直されるようになった。一方では人民公社の廃止と都市改革が社会生活の再組織の制度的な基盤を用意し、他方では現代化の言説空間が革命やユートピアを脱色させ、社会生活の世俗化をもたらしている。例えばテレビドラマや各種の芸術祭りなどが初めて中国社会に登場すること、また時にはその大胆な表現様式で論争を引き起こしたことは、社会生活の実像を映し出している（焦 2001: 850-60）。要するに 1980 年代から今日に至るまでの、言わば大衆社会の生成は現代中国の日常的な社会生活の様態を一変させているのである¹⁵。

3-2 現代化の言説的特質

以上のように生成した現代化の言説空間から、現代化に関する次の二点の特質が読み取れ

ると思う。

第一に、普遍的な発展図式に則る現代化。事実、社会实践として、1977 年に既に始まった農村の生産方式の改革とその後展開された都市の経済改革は、殆ど停滞なしに行われてきた。四つの現代化論とともに仕上げられた社会発展の路線とは、「経済建設をもって中心とすること」であった。そして、この新たな路線とその見取り図は、はじめて現代化の言説群——工業化、市場経済、生産力の解放と発展など——によって描かれるものとなった。このように、現代中国は 1980 年代に入ってはじめて、1950 - 60 年代のアメリカや日本で隆盛を極めていた現代化論的認識の地点に到達したと言わざるを得ないだろう。

その問題点は次節で検討するが、現代化をめぐる問題群が全国にわたって議論された結果、思想の解放、すなわち硬直的な教条のマルクス主義のイデオロギー——例えば「階級闘争」という綱領——からの解放が促進された点をまず指摘しておく必要があるだろう。まとめると、思想解放運動と現代化の実践とが相まって、現代化を中心に新たな言説空間が形成し、そこにおいては中国社会の発展と人間の行動様式は新たな様相を呈するようになった。

第二に、開かれた言説空間の骨組みとしての現代化。言い換えると、現代化的言説空間は革命的言説空間と比べて、より多様な言説の存在を許容するメカニズムを有している。もちろんこれは新しい言説が直ちに合法性を取得できることを意味しない。むしろ革命の言説空間と同じく、現代化とその周辺に配置されている同種の言説は、新たな権力のメカニズム——ゆえに新たな「真理体制」——を担うようになり、新たな異種の言説を検閲する機能を果たしていく。

だがこれは現代化的言説空間がその先行者と同じ硬直さを持っていることも意味しない。ここでは、現代化の言説には社会発展と合致するような側面があることに注意を促しておきたい¹⁶。つまり、現代化の言説を確立させる基礎とも言える現代化の実践は、社会を変える本質的力を発揮し、中国社会を世界的に一般的とされる発展の軌道に乗せた。そこで、問題となってくるのは、具体的な実践の中で、一定の自立性を有する異種の諸言説が中心的な言説としての現代化と交渉を行い、独自の認識を生み出すことなのである。次節で検討する現代化への批判としての言説が、その代表的なものであろう。

4 現代性の言説空間

さて思想解放と現代化がもたらした諸問題とが相まって、1989年の社会運動を引き起こした。この出来事は1978年以來の現代化ないし1949年以來の革命的現代化の観念をさらに大きく変えるほどの事件となった。事件を経験した中国は、三年の調整と模索を経て1992年に市場経済を導入するに至ったのであるが、このときこそ、市場のメカニズムとそれが駆動する社会の潜在的力が初めて認識されるようになったのである。こうした事態の中で、既存の現代化の言説空間が大きく動揺するようになり、現代化自体を批判することまでを内包する「現代性」と「後現代性」の言説空間が新たに編成し始めた¹⁷。

4-1 現代性の言説の背景

実際には1989年の社会運動が訴えていたのも現代化であったが、そこで主張されていたのは具体的には、社会の民主化という目標であり、それは国家に規定された現代化という既定の意

味内容をはみ出すものであった。本来、社会の民主化とは現代化に内包されているはずの側面であり、それは1978年以降数多くの知識人によって期待されていたものであった。であればこそ、本来の現代化を希求していた知識人らの挫折は大きかったと言えるだろう。結局、国家権力を基底とする現代化の言説に対する不信が顕在化し、政府によって推進されたプロジェクトに対する批判が現れた。このように、「1989年の危機は、……中国現代性の性質、任務と条件に関する、もっと深層的かつ根本的問題を提起している」（徐1996:78）。

だが同時に、経済の現代化は未曾有の局面を迎えるようになった。その転換点は1992年に「社会主義市場経済体制」の正式の導入である。その後、中国経済は急速に成長を見せ、グローバルな経済システムの一環となりつつある。このように、計画経済体制の終焉と社会主義イデオロギーの衰退は、経済の高度成長とグローバル化と相まって、中国の現代化を考え直す新たなコンテクストを作り出しつつある（張1999）。

要するに、（1）1989年の政治事件に由来する政府権威の失墜とそれに伴う現代化言説への懐疑、（2）1992年以降の社会の市場化と経済の発展、の二点が1980年代に隆盛した現代化の言説に対する見直しの背景となっている、と指摘することができる。これらの言説的環境の中で、現代化に固有の矛盾が晒されるようになり、現代化の構想が語り直されるようになっている。

4-2 現代性の言説空間の編成

では、批判的な現代性と後現代性の言説がいかにして成立し、またそれぞれの言説はどのような現代化の抱える問題を暴いているのだろうか

か。以下、前述の革命や現代化の言説空間と同じく、言説と社会的実践という二つの視角から現代性の言説空間の編成を描いておこう。

(1) 現代性と後現代性の言説の成立——1988年に出版されたマックス・ウェーバー、ミシェル・フーコーなどの西洋思想家を紹介する論文集『中国当代の文化意識』の序言において、編者である甘陽ははじめて現代性の問題を指摘している。「近現代以来、とりわけ本世紀以来の西洋思想家の根本的問題関心は、この問題（現代性）をめぐって展開したのである。……中国の知識人は、当代西洋文化に対する把握のためには、この共同の問題に焦点を合わせなければならない」。そして現代に対しての反省と検討を通じて、「当代西洋文化の内的メカニズムとその根本的な矛盾を把握する」ことは、「間接的に中国文化の今後の方向を改めて考えること」にもなるのである、と指摘している（甘1988）。

言い換えると、上述のような現代性への把握は、従来の現代の光の側面ばかりを強調するような、「現代化」という文脈での「現代性」とは異なり、まさに欧米の社会理論におけるような両義性を有する現代性の把握をも内包していた¹⁸。だが、このように提起された現代性の言説は、明らかに、当時主流であった現代化の言説とは食い違っていたのであって、結局、現代性の言説が確立されるのは1990年代を待たなくてはならなかった。

そして、1992年から現代性を紹介したりそれを骨組みとして中国社会を分析したりする論文が多数表れ、新たな言説空間が形成した。特に1990年代の後半に入って現代性を論じる論文が多くなった。例えば汪暉（1999, 1998）は、現代化に内在する現代性の両義性——に注目し、現代中国の社会思想の全般をこうした現代

性の枠組みにおいて捉え直している。また嚴復、章太炎、梁啓超、魯迅なども現代性の思想家として捉え直されている¹⁹。結局、「中国的現代性の視野は伝統と現代、中国と西方、西方と現代が錯綜している関係に入り込んだ。現代性に対する止揚と反省の過程で中国は自ら、自身の現代性を構築していく」（向2001: 159）、と主張されている。

他方、ほぼ同じ時期に、もっぱら現代化・現代性批判を主旨とする後現代性の言説がまず文化批評の分野で登場した（陳2000: 172; 臧1998: 25）。

実際、後現代の言説に先立って1992年には、既に「後新时期」という1989年以降の文学スタイルの変化を捉える概念が現れた。この概念は、文化大革命後の時期を指す公式的な言い方としての「新时期」に相對するものである。事実、この新时期においては「イデオロギーの形態と政治権力の構造の連続性を維持することを前提に、いくつかの新しい約束をしていた。そのうち、最も重要なのは『現代化』である」（徐1996: 77）。であればこそ、「1989年の政治危機」と国家による、ある種の「危機解決の手段の使用」は、中国の「現代性」の異様さを浮かび上がらせていた。そこで、時期を同じくして現れた「後現代」言説と連動して、一部の中国知識人は「先進資本主義社会における『後現代』との共時的なつながりをうち立てようとしていた」（徐1996: 78）。

現代性とほぼ同時に現れた後現代性の言説は、さらに「他者」「脱中心化」「ポストコロニアリズム」などの言説を伴っている。そして重要なのは、後現代性の有する「理性」、「主体」、「意味」などに対する脱構築の役割が直ちに中国の現実分析に応用された点である。マルクス主義の言説に対する批判がそれである（余2001）。

こうした後現代性の言説が1990年代の多くの知識人に「ショックを与えていた」(眩 1998: 27)ことは当然であろう。というのは、幾多の挫折を経て辛うじて現代化の軌道に乗った中国の知識人に対しては、現代性の言説に担われた現代化に対する懐疑と、後現代性の言説に担われた現代化に対する脱構築と離脱は、まずは一種の感情的「錯乱」をもたらしたからである。

(2) 社会生活の自由化——また、こうした(後)現代性の言説空間におけるイデオロギーの信憑性がほぼ破綻した結果、社会生活の多様化・自由化が1980年代のそれより一層進んでいる。例えば1990年代の後半に1978年までの中国社会に莫大な影響を与えていた「赤の経典文化」——映画、模範劇、小説など——の焼き直しが氾濫するほど現れた(孟 2003: 58-63)。しかし今回の場合、それが全く市場の考量で行われた点が特筆に値する。また、より重要なのは、これらのかつてのイデオロギーを担うメディアに対する社会の態度とこの時期の言説空間との相互補完的な関係がある。ゆえに、こうした言説空間を支えているのは1980年代以来の社会階層の文化、いわゆる「中産階級」の出現とその生活スタイルの形成(孟 2003: 222-9)である、と言えるだろう。

4-3 現代性の言説空間における現代化と革命

以上のような批判的意識に富む雰囲気の中で、現代性とその周辺にある概念群は新しい分析装置として祭り上げられ、かつての中心的な概念であった中国の現代化と中国革命とが改めて検討されるようになった。ここでは、こうした最新の言説空間における現代化と革命それぞれの意味を見ておこう。

(1) 現代化への再考——第3節で示したように、1980年代に隆盛した現代意識とは、現

代化論的な認識図式に則っていた。そしてこの図式が現代化自体への反省を促す契機となったのである。ところが、現代性の言説空間の再編は、まさにそれらが有する批判的視角によって中国独自の現代化の方向性を方向付けるための理論的手段となっている。

例えば、中国の現代化の目標は、「一つの新しい文明秩序を構築すること」(金 1996: 28)とされているのである。つまり、現代性の言説空間においては中国の現代化が文明論の視点から論じ直されているのである。また陳嘉明は中国社会の現状に照らして、現代性を「伝統から現代への転換」、「自由を中核とする観念」、「競争メカニズムの合理的規範」の三つの特徴を持つものとして、既存の現代化にある、前近代的な古い伝統と1949年以降に形成した、マルクス主義の新しい伝統を抉り出し、「中国の現代性が断絶しようとするのは、まさにこうした社会の進歩に相違する新旧の二つの伝統なのである」、と指摘している(陳 2003: 17-8)。このような認識の中で、「伝統の倫理観念」と「急進的なマルクス主義」という新旧の伝統が中国現代性の障害とされているのである²⁰。

視点は多少異なるが、楊春時によれば、「現代化のプロセス」の中で、中国の「現代性」は「感性的欲望の解放の欠如」、「道具理性的ダイナミズムの不足」、「形而上学的世界観の空白」という三つの欠陥を形成してきた。そこで、「市場経済の整備」、「社会関係の改造」、「自由意識の育成」と「宗教との協調」などの視点から中国の現代性を再構成しなければならないという(楊 2003: 45-7)。また周は「後現代性」の意義を認めるにしても中国において「現代性の転型を推進することが主要な目標である」、と主張している(周 2003: 70)。

まとめると、現代性が両義的なものであるか

らこそ、中国の現代化は一方でその光の面を実現させなければならず、他方ではその影の一面を克服しなければならないこと、これが1990年代以降の現代化の意味とされているのである。

(2) 革命への再考——他方では、現代化の言説空間の中で一時的に棚上げされていた革命の言説は、再び再検討の機運を迎えるようになった。そして「革命的現代化論」をめぐって、次のような二つの視点から革命を正当化する言説が浮上している。

まずは、現代中国思想の論者汪暉は毛沢東主義における革命的現代の意味を検討している。具体的に彼は、「反現代性の現代化論」という表現を持って毛沢東主義の現代化を特徴付けている。「毛沢東主義は、……ヨーロッパとアメリカ的資本主義の現代化に対する批判である。ところが、この批判は現代化そのものに対する批判ではなく、それは革命的イデオロギーとナショナリズムの立場に基づいた、現代化された資本主義の様式もしくは段階に対する批判なのである」(汪1998:275)。また陳暁明は、1950年代以降の中国に行われた社会実践について、それは「飛躍の様式で中国の現代化をやり遂げようとし、その実質とは、特殊な方式で資本主義の現代化の世界秩序(およびその論理)を脱出しようとした」と指摘している(陳1997:41)。

このように、「革命」と「革命的現代化」の可能性は再評価されている²¹。その再評価とは、もはや、現代化的言説空間に表出していたような矛盾だらけの、もっぱら否定的なものではなく、むしろ、そこに試された新たな可能性——資本主義的現代性に対する超克——なのである。かくして、革命と現代との関係が再び問い直されるようになっていく。

他方、上述のような再検討と異なり、主に「告

別革命(さらば、革命)」論の刺激によって、革命を正当化しようとする新たな言説が形成している。告别革命論とは、思想解放運動の過程で急先鋒であった李沢厚と劉再復が対談の形で発表した、「大衆暴力などのラディカルな様式で現存制度と権威を覆す激しい行動」としての革命に対する反省と批判によるものである。そして、侵略者を反対する、所謂「民族革命」は例外とされたものの、辛亥革命から社会主義革命までの一連の出来事は、革命よりも改良という図式において、告别すべき歴史となった(李・劉1995)。

上述の観点に対して、国家は組織的に反論を行い、「現代化的革命論」を形成していると思われる。実際、「いわゆる革命を告别することは、社会主義とマルクス主義を告别することである」という受け止め方(谷1996:20; 盧2000:73)は、次のような危機感を表明している。すなわち、「もし近代以来の中国革命の理論と実践を丸ごと解体したら、革命の成果としての人民共和国はその合理性をなくしてしまうのではないか」ということである(盧2000:72-3)。そこで、国家による現代化言説の合法性が根本的に試されており、そのために系統的に革命と現代化についての正当化が再び要求されている。

そこで、「革命の歴史的必然性」についての論証をはじめとして、「革命は近現代中国の発展の牽引車である」、「革命は現代化を実現するために通過しなければならぬ段階であり、現代化に内在している」、「中国現代化は中国革命が発生する根本的な背景であり、中国革命は中国現代化の発展の産物である」、「革命を通して、国家の独立と統一を実現し現代的国民国家を樹立することは、中国の現代化にとって必要不可欠な段階である」などのような革命をめぐる新

た言説が現れた²²。

言うまでもなくこれらの言説はともに進行中の、かつ一定の成果を成し遂げている実践をもって革命を正当化しようとする特徴を有している。つまり、今度は現代化の言説が逆に革命言説の基礎付けとなっている。この時点で現代化というものに中国独自の価値が付与されていたことを考えると、こうした現代化的革命の言説とは、西洋的な現代化様式に対する批判的な視点に立つものでもあることが理解されるだろう。かくして、現代中国における主流の認識は、革命と現代化との表裏一体の関係を作り上げているのである。

要するに現代性の言説空間においては、1980年代の現代化言説とそれまでの革命言説が再び批判的に検討された結果、近現代中国の社会変動がある程度正当化されると同時に、現代化言説は一層多岐に論じられるようになっている。

5 おわりに

本稿は現代中国の社会思想の領域における三つの中心的な言説を中心にそれぞれの言説空間の編成を描き、現代化の言説がいかに関与されてきたのかを検討した。まとめると、現代中国は建国から1978年の政策転換まで、オーソドックスな言説は革命であり、革命的な現代化論がこの言説空間の中で形成し実践された。そして改革・開放の1980年代においては、中国社会は西洋的な現代化論に一時的に到達したが、1989年の政治運動とその後の市場化によってそれが途絶し、今日の（後）現代性の言説空間の中では尚別様に語られているのである。

さらに強調しておきたいのは、この三度行われた言説空間の再編は、ともに主導的な言説と

周辺の言説との複雑な交渉プロセスを経て成立した点である。特にその過程で現代化言説の転換とそれが現代中国の社会生活に与えた広範な影響は際立っていると思われる。したがって多様な社会認識の生成と変容を含む現代中国の社会変動を分析するに当たっては本稿で描かれた現代化をめぐる言説空間に注目する必要があるだろう。

例えば1990年代以降、新しい社会認識の生成を現代性の言説空間の中に位置させると、そのメカニズムがより理解される。簡潔に述べると、現代性の言説空間の成立とともに、歴史的目的とされていた革命や現代化の理念が単なる個別の言説の一つにまで格下げされるようになり、かつての言説空間の均質性と一元性が破壊され、異質的諸言説の生成と存在が許されるようになっている。このように、新しい諸認識は現代化をめぐる言説空間という母体から生成している、と言えよう。より具体的には、本稿における言説空間に注目することの意義については次の二点を指摘することができるだろう。

第一に、現代化に対する認識の転換。現代化をめぐる言説空間の再編は、中国における従来の現代社会・現代化に関する認識枠組みを抜け出る契機を作り出している。というのは、革命—現代化の言説空間においては、中国社会の発展はもっぱら資本主義—社会主義というような二元対立の図式において認識されており、その対立は、長い期間、社会認識の基底をなすものでもあったからである。もしイデオロギー的・綱領的に発展のあるべき道筋を規定するような、こうした言説空間が残存する限りにおいては他の認識が存在する可能性はあり得なかったとすれば、ここで革命から現代性に至るまでの言説空間の転換の意義とは、まずは革命的・マルクス主義的な現代化論を脱構築し、複数の言

説類型が可能となる契機を作り出してきたことであると、捉えることができるだろう。

第二に、諸々の新たな社会認識の生成。現代化言説の多元化に伴うのは、社会のあり方に対する多様な認識の生成なのである。本稿の冒頭で挙げた「市民社会論」などはその例であろう。但し、現代中国においては三度の言説空間の再編が起こったとはいえ、それが言説の完全な断絶をもたらしたことを意味しない。むしろ、本稿の第4節が示しているように、それぞれの言説は、歴史的な意味づけに基づきながら、社会生活の現実的条件による選別と新たな意味付与を通じて、新たな変形の過程を経つつ形成してきたものなのである。換言すれば、中国社会の変動は、言説空間の再編——中心的な言説をめぐる諸言説の配置と新しい意味の集積——に反映されているものだが、逆にその再編は常に経験的な社会変動を形作っていくと考えられる。

最後に、本稿は現代化言説の史的諸相にスポットライトを当てて検討したとはいえ、別の視点から見ると、中国社会は「現代とは何か」というより普遍的な問いの答えを一貫して模索し構想しているとも見える。よって本稿の検討から、現代世界が抱える一般的な現代についての問いが、革命の言説から現代化の言説を経由しつつ現代性の言説に至るという現代中国における言説空間の変遷の過程で、いかに翻訳され主題化されてきたかを理解することもできるだろう。本稿はこのような現代化の諸言説空間の深層に横わたっている現代とは何かが問われ続けるという構造について詳しく分析する余裕はなかったが、これらは今後の課題としたい。

注

¹ 汪論文（1998）は1994年に書かれたものだが、

正式の発表は1998年であった。

² ここで本稿の中核的なタームの意味を説明しておく。「現代化」とは、中国社会科学の領域においては最も頻繁に使われている用語で、日本語の「近代化」もしくは英語の「modernization」に相当する。中国のコンテクストにおけるこの用語の重要性を鑑み、本稿は敢えて「近代化」と訳さずに使用する。同じく「現代性」(modernity)、「後現代性」(post-modernity)に対応する日本語の表現(近代性、モダニティ、ポストモダニティなど)があるが、本稿では原語を用いることにする。実際、中国知識人が「現代」という言葉に拘るには理由がある。一般に、「近代」という用語が避けられた理由としては、ロシアの社会主義革命とその史観があることが指摘されている(羅 2004)。だが本稿としてはむしろ、こうした偶発的事情の結果として、中国社会に「現代」という用語が与えることになった効果——本稿が論じる知識人による現代化への絶え間ない問いはその現れの一つだが——にその根拠を求めたいと思う。

³ 香港の学者金耀基は1960年代に既に現代化を軸に中国の近現代史を論じた(金 1969)。

⁴ 例えば赤川学が提唱している言説の歴史社会学においては、言説空間を再構築することこそ、言説分析という方法の正念場とされているが(赤川 2005)、より広い言語学的実践として、現代社会のイデオロギー批判を主旨とする批判的言説分析(CDA)がある(Fairclough 1992)。これらの見方を検討することは本稿の主題ではないが、私は次の渡辺彰規の主張に賛同する。すなわち、「言説をどう見るかということは、その論者が、社会のしくみを規定するどのような動因に注目しようとしているのかによって変わってくる」(渡辺 2005: 272)という主張である。

⁵ 言説の社会からの自律というあたかも共通了解としての認識への批判は、渡辺(2005)の明快な論証を参照していただきたい。本稿はむしろ現代中国

というローカルな経験に基づいて、具体的に言説と社会の仕組みとの関係を例証するものである。よって本稿の社会（科）学的意義もここにあると思う。

⁶ 例えば「文化上の伝統文化の破壊と新しい文化の創造を表現していた」（陳 2004: 15-6）革命の意味は一般的なものである。

⁷ つまり、「中国共産党の指導する中国革命運動全体は民主主義革命と社会主義革命の二つの段階を含む革命運動全体であり、……民主主義革命は社会主義革命の必要な準備であり、社会主義革命は民主主義革命の必然的な発展方向である。そして、すべての共産主義の最終目的は、社会主義社会と共産主義社会の最終的な完成のために努力することである」、と（薛ほか 1960）。

⁸ このテーゼは李沢厚（1989）によるものである。革命が啓蒙を圧倒した結果、科学と民主を課題とする啓蒙が未完のプロジェクトであり続けている。このテーゼは革命の現実を物語っていると同時に、革命に対する批判のモチーフをも含めている（李・劉 1995）。

⁹ 文革はそうであるが、その前に行われた知識人の思想改造、映画『武訓伝』批判、小説『紅樓夢』研究批判、胡適批判、文芸理論批判などが挙げられる（王建剛 2004）。

¹⁰ 例えば、「国民経済の社会主義改造」、「反右派闘争」、「大躍進」、「文化大革命」などの出来事は、ともに党による政治動員と大衆の参与によって推進されたのである。

¹¹ 実際、文革の終焉を迎えた 1976 年には中国の経済はほぼ崩壊寸前であった（於 1983）。

¹² 本節においては「現代化」とは 1980 年代に隆盛した狭い意味で用いる。それを支える具体的な制度変革についての解説は、浜（1995）を参照のこと。

¹³ この運動は 1992 年以降にも行われているという見方がある（馬・凌 1998）。

¹⁴ 例えば文革の直後に現れた「傷跡の文学」と呼

ばれる作品群は、「人道主義」に訴えていたものの、「革命者」や「人民」などの主流の言説に大きく依存していた（何 2001）。また、文革後の民主化運動に対する弾圧は代表的な事件であろう。

¹⁵ 現代中国における大衆社会研究の現状は陶（2006）を参照。

¹⁶ 現代化論の信憑性が殆ど喪失してしまった今日においては、個別の社会の特殊性と発展の普遍性とがいかなる関係を有しているのか、を比較社会学の視点で検討する必要があるだろう。

¹⁷ 現代性と後現代性とは異なる用語ではあるが、（1）両者がほぼ同時に中国社会科学や文化批評の領域に現れたこと、（2）両者がともに現代化を疑問視する上で一致していること、（3）前者がより広範に使われていること、の三点を考え、本節では「現代性の言説空間」という表現で統括する。

¹⁸ 既に指摘されているように、「中国では現代性に対する批判は特殊の困難を抱えている。なぜなら、このような批判は必然的に主流のイデオロギーと食い違うからである」（李 1996: 388）。事実、現代化という言説は、革命という言説との対決においてはその進歩的意味を示したが、それは逆に新たなイデオロギーと化してしまった。

¹⁹ また姜（2001）、単（1998）などによる現代性論の論旨も大同小異である。現代性言説の成立については向（2001）を参照。また代表的な論文集としては張（2005）を参照。

²⁰ 同じ見解は鄭杭生・楊敏（2003: 19）にも見られる。

²¹ 文脈はやや異なるが、劉小楓（1998: 422）は、「マルクス・レーニン主義の真髄は社会主義による資本主義に対する超克である。……中国で社会主義を実現することは西側を乗り越えることを意味するのである」、と指摘する。

²² これらの引用は主流の認識と言える。呉（1997）、陳（1998）、晁（1998）、劉（1994）、劉増旭（1998）、盧（2000）、陳・周（2002）などを参照。

文献

- 赤川学, 2005, 「言説の歴史を書く——言説の歴史社会学の作法」 盛山和夫ほか編『〈社会への知〉／経験知の現在』勁草書房.
- 陳平原, 2004, 『当代中国人文觀察』人民文学出版社.
- 陳曉明, 1997, 「『文化民族主義』的興起」『二十一世紀』1997年2月号, 35-43.
- 陳嘉明, 2003, 「“現代性”与“現代化”」『厦門大学学报』(哲学社会科学版) 2003(5):14-20.
- 陳建華, 2000, 『「革命的」現代性：中国革命話語考論』上海古籍出版社.
- 陳妹・周建超, 2002, 「民族独立・現代化・中国革命」『南京中医藥大学学报』(社会科学版) 2002年3月, 20-23.
- 陳向陽, 1998, 「中国革命与中国現代化」『華南師範大学学报』(社会科学版) 1998(5):8-14.
- Fairclough, N., 1992, *Discourse and Social Change*. Polity Press.
- Foucault, M., 1984, 「真理と権力」『ミシェル・フーコー 1926-1984 権力・知・歴史』桑田禮彰・福井憲彦・山本哲士編, 新評論, 1984.
- 甘陽(編), 1988, 『中国当代文化意識危機』香港牛津大学出版社.
- 谷方, 1996, 「評『告別革命』」『求是雜誌』1996(15):14-20.
- 浜勝彦, 1995, 『中国——鄧小平の近代化戦略』アジア経済出版会.
- 何言広, 2001, 「突圍与禁限」張頤武(編), 『現代性中国』河南大学出版社, 2005.
- 金耀基, 1996, 「論中国的『現代化』与『現代性』——中国現代的文明秩序の建構」『北京大学学报』(哲学社会科学版) 1996(1):20-27.
- 金耀基, 1969, 「現代化与中国現代歴史」『金耀基自選集』上海教育出版社, 2002.
- 姜義華, 2001, 「現代性追求：当代中国思想重構」『復旦大学学报』2001(5):30-36.
- 焦潤明(ほか編), 2001, 『当代中国社会文化變遷錄』(第3卷) 瀋陽出版社.
- 曠新年, 1998, 『現代文学与現代性』上海遠東出版社.
- 藍愛国, 2003, 『解構十七年』華東師範大学出版社.
- 羅榮渠, 2004, 『現代化新論——世界与中国的現代化進程』(增訂版) 商務印書館.
- 李陀, 1996, 「对現代性的对抗——中国大陸80年代文学批評的反思」邵玉銘等編『四十年来中国文学』聯合文学出版社有限公司, 384-396.
- 李沢厚, 1989, 『中国の文化心理構造——現代中国を解く鍵』(坂元ひろ子ほか訳) 平凡社.
- 李沢厚・劉再復, 1995, 『告別革命——回望二十世紀中国』天地圖書有限公司.
- 李海燕, 1999, 「話説『白毛女』——民族叙事中的階級与性別政治」『二十一世紀』1999年4月号, 110-118.
- 劉国華, 1994, 「对『革命』含義的思考」『安徽農業大学学报』(社科版) 1994(1):38-40.
- 劉小楓, 1998, 『現代性社会理論緒論——現代性と現代中国』上海三聯書店.
- 劉旭增, 1998, 「中国革命与中国現代化研討会觀點綜述」『理論前沿』1998(3):25-26.
- 盧毅, 2000, 「『告別革命論』評析」『雲南社会科学』2000(2):72-77.
- 羅崗・毛文尖(編), 2000, 『90年代思想文選』(全三卷) 廣西人民出版社.

- 馬立誠・凌志軍, 1998, 『交鋒』 今日中国出版社.
- 孟繁華, 2003, 『衆神狂歡——世紀之交的中国文化現象』 中央編訳出版社.
- 彭華・鄧建偉, 2003, 「從政治話語向生活話語的轉變——紅村個案研究」 『寧夏党校學報』 2003年9月, 83-88.
- 单世聯, 1998, 『反抗現代性: 從德国到中国』 廣東教育出版社.
- 陶東風, 2006, 『当代中国的文化批評』 北京大学出版社.
- 汪暉, 1999, 「關於現代性問題答問」 『天涯』 1999(2):18-34.
- 汪暉, 1998, 「当代中国的思想狀況与現代性問題」 『90年代思想文選』 (第一卷) 廣西人民出版社, 2000.
- 王曉明, 2004, 「近代中国における民族主義」 (坂井洋史訳) 『文化アイデンティティの行方』 恒川邦夫ほか(編著), 彩流社, 2004.
- 王建剛, 2004, 『政治形態文芸学』 中国社会科学出版社.
- 渡辺彰規, 2005, 「ミシェル・フーコーにおける言説の諸性質について——〈言説分析〉から〈言説〉の諸分析へ」 『年報社会学論集』 第18号, 264-275.
- 吳賢輝, 1997, 「革命, 現代民族国家与中国革命」 『華僑大學學報』 (哲学社会科学版) 1997(4):7-11.
- 向兵, 2001, 「『現代性』 中国叙事二十年」 『学海』 2001(3):156-161.
- 曉静, 1998, 「近代中国為什麼選擇了革命」 『蘇州大學學報』 (哲学社会科学版) 1998(1):104-107.
- 徐真, 1996, 「什么是中国的『後新時期』?」 『二十一世紀』 1996年8月号, 74-83.
- 薛暮橋・蘇星・林子力, 1960, 『中国国民經濟の社会主义的改造』 北京外文出版社.
- 楊春時, 2003, 「現代性与中国現代性的總体構成」 『求是學刊』 2003年1月, 44-47.
- 於光遠(編), 1983, 『中国の社会主义現代化建設』 北京外文出版社.
- 余虹, 2001, 「“現實”的神話: 革命現實主義及其政治意蘊」 『文化研究』 第2輯, 天津社会科学院出版社, 222-263.
- 張樂天, 2001, 「国家話語的接受与消解——公社視野中的“階級”与“階級鬭争”」 『社会学研究』 2001(1):73-85.
- 張樂天, 1998, 『告別理想——人民公社制度研究』 東方出版社.
- 張旭東, 1999, 「後現代主義与中国現代性」 『讀書』 1999(12):12-20.
- 張頤武(編), 2005, 『現代性中国』 河南大学出版社.
- 周建章, 2003, 「現代性: 局限与價值——後現代話語与中国語境」 『厦門大學學報』 (哲学社会科学版) 2003(4):70-76.
- 鄭杭生・楊敏, 2003, 「現代性過程与社会学理論的個性——社会互構導論: 中国特色社会学理論的新探索之一」 『廣西民族學院學報』 (哲学社会科学版) 2003年7月, 12-20.
- 朱育和・張勇・高敦復(編), 1997, 『当代中国意識形態錄』 清華大學出版社.

(り えいしょう、東京大学大学院、nalanwq@hotmail.com)

(査読者 渡辺彰規、氏川雅典)

Formation and Transformation of Discourses on Modernization in Modern China

An Examination from the Angle of Discursive Space

LI, Yongjing

Nowadays, the landscape of knowledge about society and social development is changing greatly in China. To understand this change, discourses on China's modernization should be examined first. In this paper, this task was approached by depicting and discussing the changing discursive spaces of modernization. These discursive spaces were rebuilt along with three key terms: revolution, modernization and modernity.